

かかりつけの診療所と基幹病院が患者のデータを共有する仕組みを構築するなど、先進的な地域医療に取り組み、医療福祉総合特区の指定を受けている香川県。今秋からは、患者宅と病院をテレビ電話でつなぐシステム「ドクターコム」の運用も始め、過疎や高齢化が進む離島やへき地での医療充実に乗り出す。

県全体の医療環境は全国平均を上回る水準だが、小豆島などでは医師不足が深刻だ。2010年の厚生労働省の調査によると、全国平均の10万人当たり21.9人に対し、小豆島を含む医療圏では147.1人と少ない。

また、12年度に行った県民へのアンケートでは

テレビ電話で訪問看護 県内3病院 今秋運用開始

「最期を迎えたい場所」のうち6割近くを自宅が占め、「香川の医療充実のために必要な対策」として約半数が在宅医療の充実を挙げた。

その一助となるのがドクターコムだ。タブレット端末を持った看護師が患者宅を訪れ、テレビ電話の機能を利用して医師の指導を受けながら看護に当たる。患者の通院負担減も期待できる。

小豆島などの三つの病院では、秋からの運用開始を予定している。9月に導入した綾川町国民健康保険陶病院長の大原昌樹は「医師の訪問には限界があり訪問看護に頼らざるを得ない。床ずれの状態など電話だけでは分からないことを画面で見ながら指示できるのは

離島などの医療充実へ新システム



「ドクターコム」の端末を操作する大原昌樹院長＝綾川町国民健康保険陶病院

直島町立ふれあい診療所の看護師蓬麻美さん(45)も受講中の一人。「島の過疎化は日に日に進んでいる。安心して暮らし続けられるように、限られた人数でもサポートできる態勢を作っていきたい」と意欲を燃やす。

ただ、すべての病院がドクターコムの導入に積極的なわけではない。テレビ電話を通じた診察では診療報酬が出ない上「対面でなければ診療ではない」という考えも根深いという。県医務国保課は「診療報酬の改定を国に訴えるには実績が必要。まずは賛同してくれるところから地道に広げていくしかない」と話す。

大きい」と語る。患者や家族の反応も良く、今後導入の追加購入も検討するという。

ドクターコムを使いこなせる看護師「オリープナス」の養成は昨年から始まり、この9月には医師が二人しかいない

(共同通信高松支局・竹生暲)